


★1 《宝暦（ほうれき、ほうりゃく）》 日本の元号。寛延の後、明和の前。1751年～1763年。幕府将軍は徳川家重（9代）、徳川家治（10代）。1751年（宝暦1）に徳川吉宗が死去し大御所政治が終わった。9代将軍家重は大岡忠光を重用し、側用人制度を復活させた。10代将軍家治は田沼意次を側用人に任じ、次いで老中にして幕政を任せた。当時の美濃では宝暦4（1754）～5（1755）年の宝暦治水事件と、同じく宝暦4（1754）年の郡上一揆という、二つの有名な事件が発生している。この時代は近世の貨幣経済が浸透し、封建的身分秩序に代わって資本主義的な社会秩序が定着しつつあった。

★2 《加納藩の歴代藩主》（この城下町絵図は安藤氏から永井氏に藩主が替わった年に作られている）

奥平氏	1601～1632	10万石	大久保氏	1632～1639	5万石
戸田氏	1639～1711	7万石（1668年に1万石を分知）			
安藤氏	1711～1756	6万5千石（美濃国内は6万石 1755年に1万5千石減封）			
永井氏	1756～1869	3万2千石（美濃国は2万3千石）			

尾張徳川家創設・名古屋築城・徳川政権の安定化にともなう加納の地位低下 → 石高減少
 中山道加納宿も正徳年間（1711～1715）が最盛期、享保（1716）以降大名の通行量減少により疲弊した。
 歴代城主は譜代大名で、老中も輩出するが城下は財政難。町人と武家の連携による和傘生産のはじまり。（1755（宝暦5）年「加納駅諸事覚帳」に諸職人141軒中に傘屋5軒の記録 19世紀初頭文政期に本格化）

★3 《大手門》 日本の城郭における、二の丸又は三の丸等へ通じる大手虎口に設けられた城門。城の正門。

★4 《木戸》 江戸時代、市中の要所や町々の境界に設けられた警衛のための門。（大辞泉）
 江戸時代は町の両端に木戸が設けられており、夜間は閉鎖して不審な者の通行を規制し、盗難の防止や防火に努めた。江戸では、木戸番（番太郎）が夜10時で木戸を閉め、それ以後の通行人は潜り戸から通し、不審者は直ちにつかまえた。（世界大百科事典） [石高の表示] = 

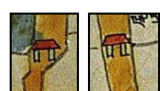

【利用の例】「加納城下町の町割りの特徴と中山道加納宿の関係を考えよう！」

- 大阪方への圧力 → 西に厚く東に薄い構造 西の大阪方と戦ういくさの布陣のような町割り
- 石高別の家臣配置 → 加納城北隣大手門内側・長刀堀西縁 = 有力家臣
 城下町中心部の家中屋敷地 = 御目見得以上 清水川北側・城下町西縁 = 実務担当武士団
 （※ 実務担当武士団のエリアに「是八徒士並小役人足軽中間屋敷」の表記 名前・石高は表記されず）

石高(こくだか) 人が1年で食べる米の量を基準にした単位。1石=10斗=100升=1,000合で約150kg。
 徒士(かち) 武士の身分の一。江戸時代、幕府・諸藩とも御目見得以下、騎馬を許されぬ軽輩武士。
 小役人(こやくにん) 地位の低い役人。下級の官吏。
 足軽(あしがる) 戦闘に駆使される歩卒・雑兵（中略）江戸時代は武士の最下層（以下略）（以上大辞林）

中間(ちゅうげん) 江戸時代、武士に仕えて雑務に従った者の称。（大辞泉）

- 川の利用 → 清水川・荒田川・長刀堀による城の防御（外堀は長良川）、運河構想は達成できず。
- 寺院の配置 → 広いエリアを確保して、戦時に出城の役割をもつ。加納城の大手門前を巨大な枡形にして大阪方を迎撃する態勢。中山道の脇に長刀堀を造成、戦時の補給体制か。

○中山道 → ・純粋に町人の生活舞台で、加納城下の中に引き込む形で設営された。
 ・長刀堀東側の大手門付近は大規模な堀によって、西側の家中屋敷地は木戸で中山道の町人と武家の生活領域が明確に区分されていた。
 （徒士役人の領域に木戸はなく、町人との往来は自由） [城下町の木戸] = 
 ・番小屋付き木戸口は城下の中山道沿いにはない（武家と町人の連携か）。
 ・加納宿の東西の端・岐阜口・寺院群裏には番小屋付きの [中山道の木戸] = 
 木戸口、城下町全体の警備・管理はできている。岐阜町とは岐阜口で直結。



[大手門]

- 枡形 → 街道に枡形を設けるのは当時の決まりだが、加納の場合は城よりも背後の江戸側にあるのが特徴。加納城の大手門に関連させて建造？ 防御より攻撃を重視か？

2013年 加納まちづくり会の公募で決まった加納のご当地キャラ「加納 かめ姫」 → 参考文献「ぎふ歴史物語 伝統の技と美」（岐阜市歴史博物館）
 「岐阜市史 通史編 近世」「岐阜県の地名 日本歴史地名大系21」（平凡社）

